１９８７年度の活動を振り返って

久米　篤

”生物同好会”こんなクラシカルな名前を持つ学生団体は最近では随分少なくなった。それにも関わらず、1987年度には大勢の新入会員を迎える事が出来た。根強い自然への憧れ、多彩で活発に見える活動内容、早稲田大学という大きな器の中に在るという事、長い伝統と過去からの多くの蓄積、こんな事がプラスの要因となっているのだろうか。何にしても、大勢の新しい仲間が入会することは喜ばしいことである。

ここ数年の新入会員の傾向の変化に、全くの新人、すなわち大学に入って初めて野外へ自然観察に出たという会員の割合が増加している事がある。一昔前には”虫屋”とか”植物屋”という名で呼ばれていた良い意味でも悪い意味でもマニアックであった会員の割合が、急減しているという事でもある。これからもこの傾向はますます顕著になっていくと思われるので、必然的に同好会のカラーも変化していくことであろう。

最近の生物同好会では生物というよりも、自然に接するということがうたい文句になってきているが、それを隠れ蓑として生物や自然に対する取組みが、随分狭められて来たような感もある。無遠慮に接触するのでは自然の方でも迷惑であろう。何故、いまだに”生物同好会”か、という問いかけが必要ではないだろうか。

自然を観察する、と一言にいってもその内容は千差万別である。もし10人が同じ活動で同じ対象を観察したとしても、その結果には10人各様の違いが見られ、各自の抱く感想も、それこそ10色になるであろう。しかしその前提としては、10人が皆、自分の五感を良く働かせて、自分の力で自然観察をすることが要求される。人と同じ対象を同じ様に見ているだけでは、何十人で見ていようと、一人で観察しているのと何等変りはないし進歩もない。自然と人間、複雑なもの同士の組合せであるから、必ずその人なりの観察結果が得られるはずである。現在の同好会の各班の活動では、大勢の人間が参加している割には、必ずしも多様な見方が為されているわけではない。せっかく野外へ出て、しかも限られた時間で自然観察をするのである。それこそ必死に、自分から積極的に自然を捉えなければもったいないように思う。他の人とは違う視点から見てやろう、という意識も必要かもしれない。各自がそのような意識を持つことが生物同好会を活性化させる特効薬であるようにも思う。

その年の活動内容はその総括でもある早稲田生物に反映する。近年の早稲田生物には、夏合宿の記録を各班の班長が半ば義務で書く、外へ対する働きかけが見られない、というような傾向がある様にも思える。この早稲田生物がその状態から脱却できたとは思えないが、少しの変化でも読み取っていただければ幸いである。

（1987年度幹事長　教育学部）